中日新聞を読んで

「失った命の意味と価値」を

上野　征洋

暑い。「グテレス国連事務総長は『地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が来た』と警告」（七月二十八日夕刊）。内外で豪雨や酷暑の被害が報じられている。

七月の紙面には物議を醸す暑苦しい政治家が二人。まず不適切発言や「責任、議会に転嫁」（十三日朝刊）で不信任案を出された川勝平太知事。その提案理由には「複数の虚偽説明があり（中略）知事の発言は一切信じるに当たらない」（同）とあった。他方、共産党に「日本からなくなったらいい」（二十七日朝刊）と言い放ち、その前には「立憲民主党をまずたたきつぶす」と公党をゴキブリ扱いしたのは日本維新の会の馬場伸幸代表。二人の共通点は、二元代表制や政党間の政策論争など有権者の声を政治に反映させる議会制民主主義の基本を毀損（きそん）していることである。独善的で有権者に思い至らぬ政治家を夜郎自大という。

岸田文雄首相はバイデン大統領との会談以降、武器輸出に前のめりで「要件緩和勢いづく自民」（六日朝刊）が「殺傷能力のある武器の輸出解禁」（二十九日社説）へじわりと近づく。背景にはウクライナ侵攻の長期化や台湾有事の緊張があるというが憲法違反の疑いもある。砲弾や武器をどんどん輸出し、他国民の殺傷に加担するならプーチン大統領と変わらぬではないか。

戦火を逃れ「至学館大学で合宿練習に取り組んだウクライナの女子レスリング代表チーム。練習の合間には学生や地元市民と交流し、戦争の現実と平和の尊さを訴えた」（二十三日朝刊）の記事は示唆に富む。「戦争とは」と問われて彼女たちは言う、「失った自由の意味を理解し、その価値に気付く日々」（同）。

今日は八月六日、そして九日が来る。広島と長崎の式典で岸田首相は何を語るのか。防衛予算を倍増し、武器輸出を促進する首相が原爆で失われた二十万以上の命に「平和の誓い」ができるのか。

戦争も原爆も人間の所業である。ウクライナの若者に学び「失った命の意味と価値」を想（おも）う八月にしたいものだ。

（静岡文化芸術大名誉教授）

2023年8月6日
中日新聞（朝刊）p.7